諏訪市埋蔵文化財調査報告第18集

清　水　Ⅰ

――長野県諏訪市清水遺跡第３次発掘調査報告書――

1990. 3

諏 訪 市 教 育 委 員 会

諏訪市埋蔵文化財調査報告第18集

清　水　Ⅰ

――長野県諏訪市清水遺跡第３次発掘調査報告書――

1990. 3

諏 訪 市 教 育 委 員 会

SHIMIZU vol. I

AN ARCHAEOLOGICAL SURVEY OF

ANCIENT SITE AT SHIMIZU

NAGANO-PREFECTURE, JAPAN

1990. 3

THE BOARD OF EDUCATION OF SUWA CITY

序

清水（しみず）遺跡は諏訪盆地の南西部、西山地区に位置する遺跡です。西山一帯には、縄文時代以降の数多くの遺跡が知られていますが、清水遺跡も、背後の山地と眼前にひろがる湖の幸に支えられて営まれたこれらの遺跡の一つであったと思われます。

今回、住宅建設に先立つ緊急発掘調査が行われた結果、縄文時代の終り頃から弥生時代にかけての遺物などと共に、墓壙であると思われるものを含む小竪穴が検出されました。この時代の遺跡は諏訪地方でも数が少ないため、当時の暮らしを考えるうえで貴重な資料になるものと考えられます。調査の成果が、今後の研究に広く活用されることを願うと共に、埋蔵文化財保護のため役立つことを望みます。

本調査は、国庫および県費補助事業として実施したものであり、文化庁・長野県教育委員会と関係者・担当者の方々には特にお世話になりました。また、調査に際して全面的に御協力をいただいた地権者の方に心から御礼を申し上げると共に、献身的に調査に携わられた調査団および調査関係者各位の御努力に対し、深く感謝申し上げる次第です。

平成２年３月30日

諏訪市教育委員会

教育長　両角久英

例　　言

1．本書は長野県諏訪市豊田に所在する「清水遺跡」（全国遺跡地図長野県番号8231・諏訪市遺跡番号311）の第３次発掘調査報告書である。

2．本調査は、住宅建設工事に先立つ緊急発掘調査であり、平成元年度国庫および県費補助事業として諏訪市がこれを実施した。

3．発掘調査は諏訪市教育委員会が調査団を編成して行い、現場における発掘作業を平成元年８月22日から８月26日まで、整理作業および報告書作成作業を８月28日から平成２年３月まで諏訪市体育施設管理棟で実施した。

4．本調査におけるレベル原点は標高海抜792.198ｍであり、本書に記載した水糸レベル等は、この原点を基準とした数値（±cm）で表示した。

5．現場における記録と整理作業の分担は次の通りである。
遺構等実測……小松・関・原・田中・両角・五味、遺物水洗注記・土器拓本実測・トレース……小松・関・原・五味、石器実測トレース……高見俊樹

6．本書の執筆は、Ⅴを宮坂光昭・Ⅳ石器を高見・前記以外と編集を五味が担当した。

7．発掘調査及び報告書作成に際し、調査・整理参加者のほかに中島和市・小林深志・藤森与一・高木美香里・亀割均・尖石考古館の各氏等（敬称略）の御協力・御指導を得た。記して感謝申し上げる。

8．本調査の出土遺物と諸記録は、諏訪市教育委員会が保管している（遺物注記 SSMA 3区）。

目　次

序
例言
目次
Ⅰ　調査にいたる経過
　１．保護協議の経過……1
　２．調査組織……1
Ⅱ　調査状況　組織
　１．調査の方法と概要……1
　２．調査日誌……2
Ⅲ　位置と環境
　１．遺跡の位置と環境……2
　２．過去における発掘調査……4
　３．発掘区の位置と基本層序……4
Ⅳ　遺構と遺物
　１．小竪穴……6
　２．その他の出土遺物……9
Ⅴ　調査のまとめ……14
主要参考文献……14
写真図版

Ⅰ　調査にいたる経過

1．保護協議の経過

平成元年4月、地主である中島和市氏より宅地化を目的とした農地の転用申請が提出された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である清水遺跡の範囲内に含まれていたため、保護協議を行った結果、諏訪市教育委員会が事前に発掘調査を行い、記録保存をはかることとなった。この発掘調査は、平成元年度国庫および県費補助事業である「千鹿頭社遺跡ほか発掘調査事業」の一部として行うこととし、市教委では調査団を編成して事業にあたった。

2．調査組織

清水遺跡調査団（3区3次）

団　　長	両角久英	（諏訪市教育委員会　教育長）
副 団 長	三ツ橋收	（諏訪市教育委員会　教育次長）
調査主幹	宮坂光昭	（諏訪市文化財審議委員・日本考古学協会会員）
調 査 員	五味裕史	（諏訪市教育委員会　学芸員・長野県考古学会会員）
調査団員	小松とよみ・関　喜子・田中　由・原　敏江・両角南子	

事務主幹	小平　武	（諏訪市教育委員会　社会教育課長）
事務局長	小松勇次	（諏訪市教育委員会　社会教育係長）
事務局員	里見雄治	（諏訪市教育委員会　社会教育係）
	久保田由紀子	（諏訪市教育委員会　社会教育係）
	五味裕史	（諏訪市教育委員会　社会教育係）

Ⅱ　調査状況

1．調査の方法と概要

調査は、地形にあわせて2m方眼のグリッド枠を組み、任意のグリッドを掘り下げる方法で行った。その結果、3Eグリッド付近で3基の小竪穴が検出されたほか、各グリッドにおいては縄文時代から平安時代にかけての遺物等が検出された。

2．調査日誌

8月21日　器材搬入・グリッド設定を行い調査開始。3Fグリッドにて落ち込みを確認、拡張掘り下げを行う。

23日　1～3号小竪穴命名・Cライン平面図および東壁セクション図作成。

24日　Cライン埋め戻し・小竪穴実測開始・全測図作成。

25日　小竪穴実測終了。

26日　埋め戻し完了・器材撤収し現地での作業終了。

Ⅲ　位置と環境

1．遺跡の位置と環境（第1・2図）

清水遺跡は、諏訪盆地南西側を面する守屋山等の山塊の山地末端部、標高約785～810mの緩やかな斜面上に位置している。中沢川および中の沢川が山地から平担部に流れ込む地点に発達した2つの扇状地の接合部にあたり、北側から西側にかけての中沢川の扇状地上には中道遺跡・女帝垣外遺跡・丹羽屋敷遺跡が、南東から南側にかけての中の沢川の扇状地には大安寺遺跡・平林遺跡・小丸山古墳が隣接している。

この地区は、茅野市の杖突峠とならび諏訪盆地と伊那谷の間の主要な交通路である有賀峠・真志野峠への登り口であり、古代から政治・経済上、重要な位置を占めていたと考えられ、周辺遺跡の多くが縄文時代から近世にかけての複合遺跡となっている。

また、本遺跡範囲内で今回の調査区の約10m東には清水古墳が位置しているが、石室の一部と伝えられる巨石が露出している他は詳細は不明である。

第1図　清水遺跡の位置（1/200,000）
諏訪教育会発行 1/100,000図使用

番号	遺跡名	立地	旧石器	縄文 早	縄文 前	縄文 中	縄文 後	縄文 晩	弥生 中	弥生 後	古墳 住	古墳 墳	奈良	平安	中世	近世
305	千鹿頭社	扇状地			●	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●
306	十二ノ后	扇状地		●	●	●	●	●	●		●		●	●	●	
307	女帝垣外	山麓				●	●	●						●		
308	女帝塚	山麓				●						●		●		
309	久保塚古墳	山腹										◎				
310	丹羽屋敷	山麓												●	●	●
311	清水	山麓			●	●	●							●	●	
312	清水古墳	山麓										◎				
313A	小丸山古墳	山麓										◎				
313B	平林	山麓				●						●				
314	有賀城跡	山頂													●	
315	中道	山麓				●				●		●				
317	大安寺	山麓		●	●	●	●			●		●		●		
318	塚屋古墳	山麓										◎				
319	クルミ沢社	山麓				●								●		
321	北山の神古墳	山腹										◎				

第2図　周辺遺跡分布図（S＝1/10,000）

2．過去における発掘調査（第3図）

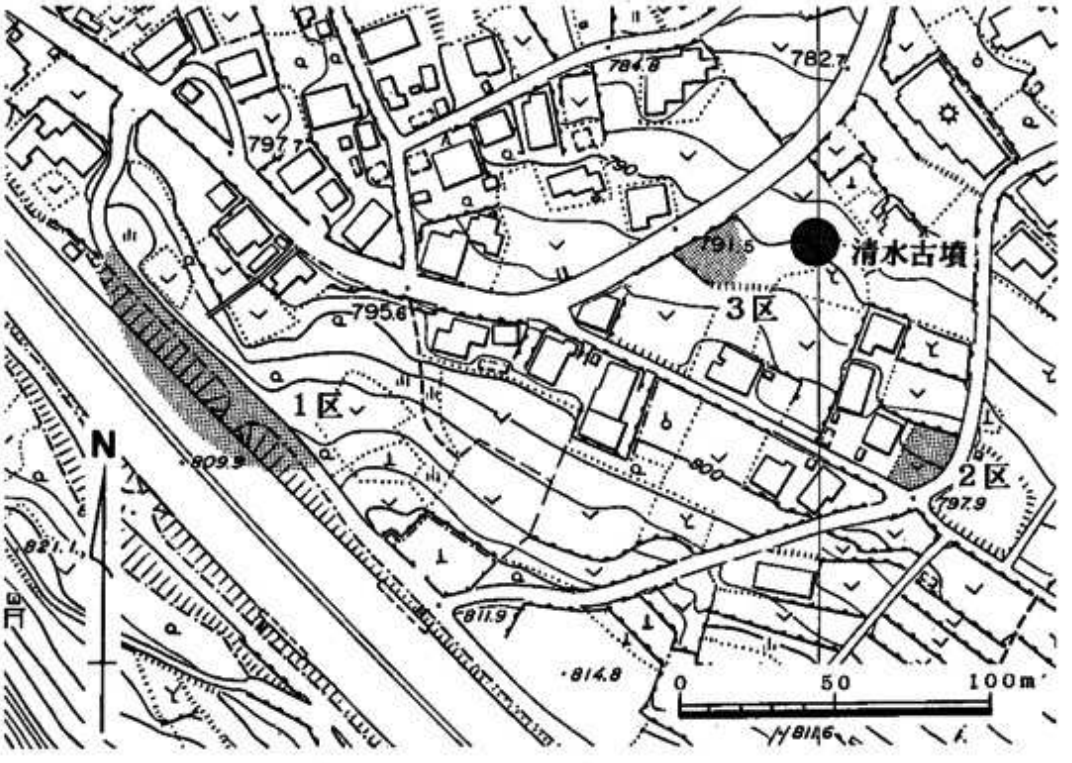
清水遺跡は昭和48年、中央道建設に先立って長野県中央道遺跡調査会により西端部が調査され、縄文土器片・須恵器片・内耳土器片・土錘が検出されたが、遺構は確認されていない（1区・第1次調査）。

平成元年3月には住宅建設に先立つ調査が行われた（2区・2次調査）。この地点は3区の南東約100m、遺跡範囲のほぼ限界にあたる。調査では、遺構・遺物ともに検出されず、地山であると思われる礫・砂粒混じりの粘土質的なローム土が現表下約数10cmにて確認されている。

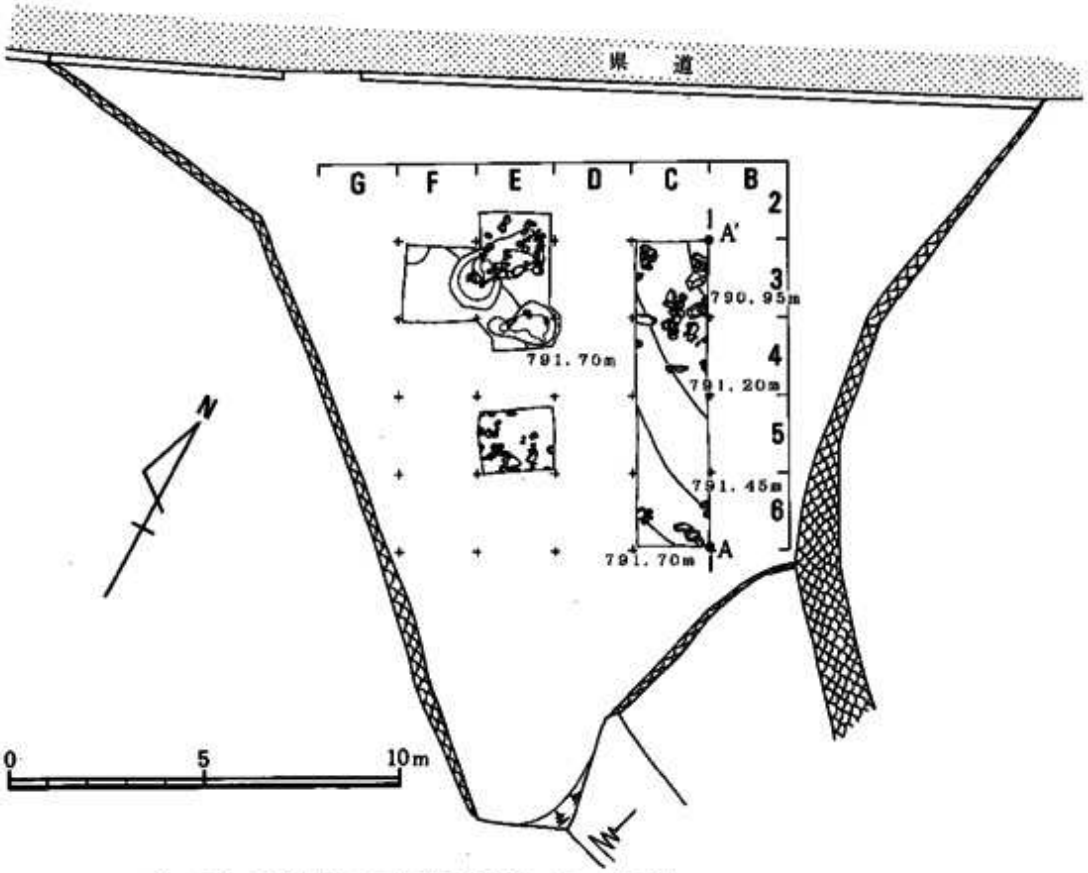
3．発掘区の位置と基本層序

今回の発掘区は、遺跡範囲中央部のやや西寄り、北東向きの緩やかな斜面上に立地する（第3図）。周辺部は畑地と宅地とが混在しており、約100m南東には第2次調査を行った2区が位置している。

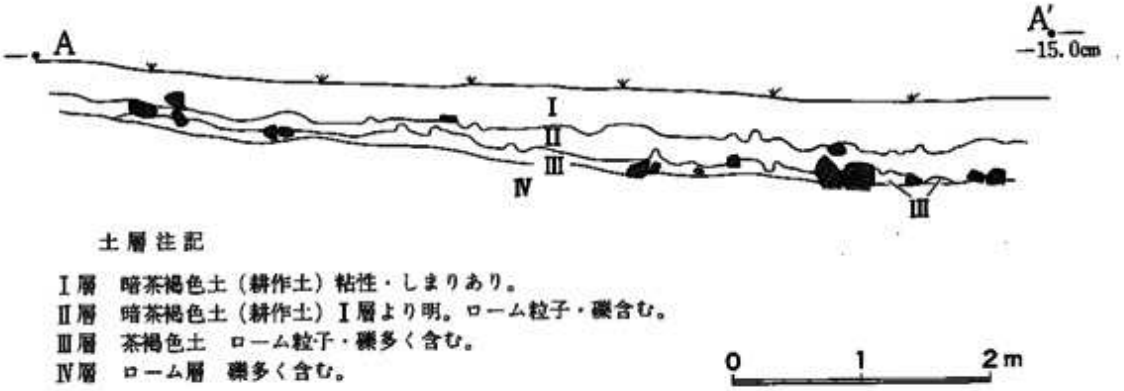
基本層序は地点によりやや異なるが、耕作土―礫混じりの茶褐色土―礫混じりのローム層という順序になっている（第5図）。耕作による撹乱がローム層におよんでいる部分も多い。



第3図　発掘区の位置（S＝1/2,500）



第 4 図　清水遺跡3区調査区全体図（S＝1/200）



第 5 図　Cライン東壁土層堆積図（S＝1/60）

Ⅳ　遺構と遺物

調査区は、現表下約数10cmでローム層に達するが、このローム土は拳大から数10cm大の礫を含んでおり、沢の影響等を受けていることも考えられる。また、ローム層上面からⅡ層にかけても若干の礫の分布が認められているが、やはり河川の氾濫等によるものである可能性が強い。

遺構としては、ローム層上面で小竪穴が3基検出されている。

1．小竪穴

1号小竪穴（第7・8図）

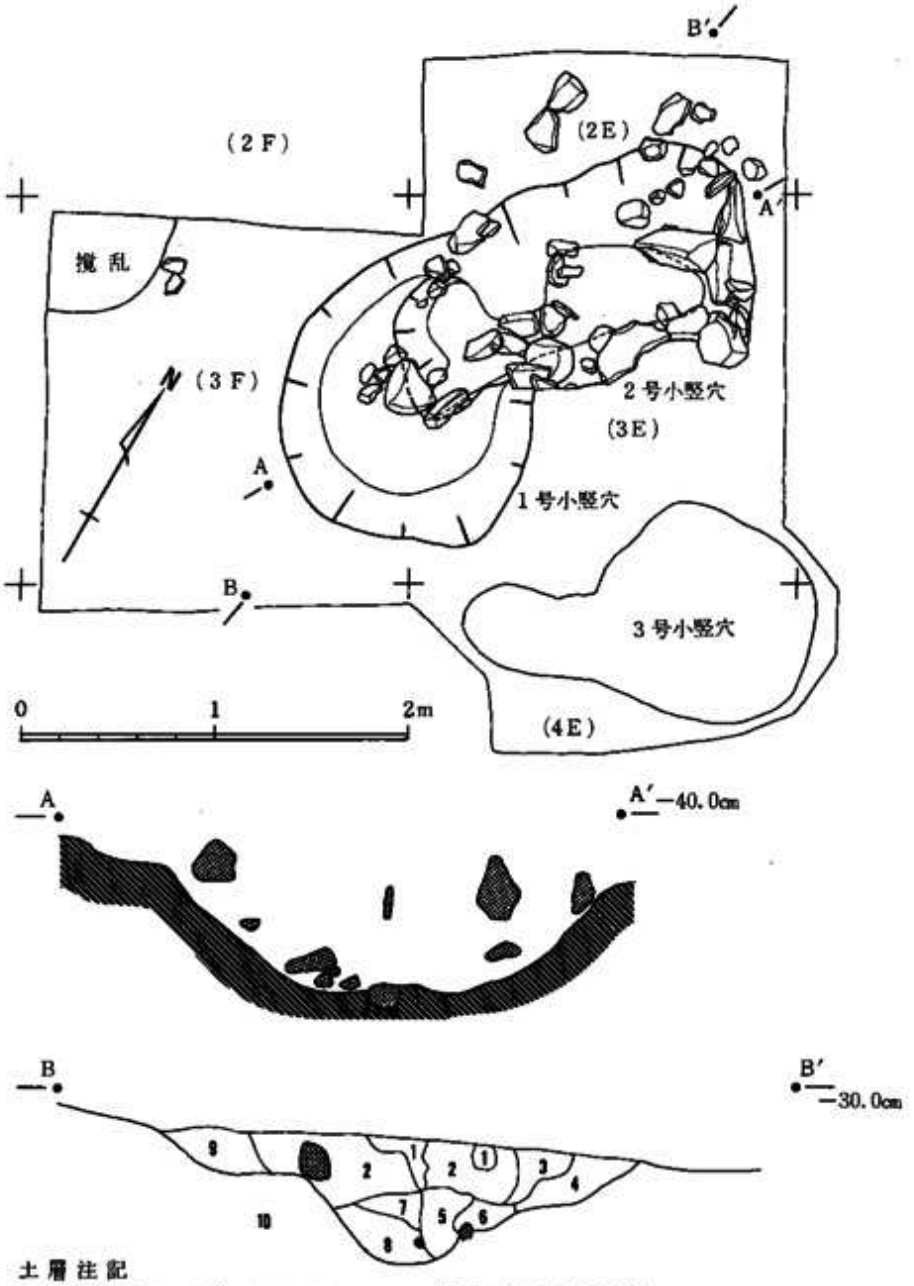
3E・Fグリッドに位置し、2号小竪穴と重複する。両遺構の切り合い関係は明確にすることができなかったが、検出時には、覆土の状況などから2号小竪穴の埋没後に1号小竪穴が形成されたようにも見えた。平面形は円形に近く、直径約150cmを測る。断面形はいわゆる皿状を呈し、覆土は茶褐色土であった。覆土中から若干の遺物が検出されているが、遺構の所属時期は確定できなかった。なお、1号小竪穴および2号小竪穴の覆土中には、木の根が多く入り込んでいたが、土層断面で両遺構の切り合い関係が明確に捉えられなかったことも考慮すると、1号小竪穴が桑株など樹木の痕跡である可能性もある。

出土遺物は、条痕をもつ土器片等が検出されたが、いずれも小片である（第8図1）。1は半截竹管、あるいはヘラ状工具による横位の条痕が施される。断面は淡褐色だが、器面は暗茶褐色を呈し、外面にはススの付着が認められる。このほかに、条痕を有する土器片が2点と、外面に擦痕状（？）の整形を残す土器片が1点検出されている。

2号小竪穴（第7・8図）

1号小竪穴と重複して2・3Eグリッドから検出された。平面プランはあまりはっきりとしないが、不整楕円形を呈する。遺構周縁部および覆土下層に拳大から人頭大の礫が検出されている。前述したように、ローム上面には水の作用等によると思われる礫の分布が認められているが、本小竪穴において検出された礫は、ある程度集中していることなどから人為的なものであると考えられる。また、覆土の下層部分は炭粒子を含んでいた。

出土遺物は、覆土中から条痕が施された土器片・無文土器片・黒耀石剥片・土師器片等が検出されている。土師器片は覆土上層の出土であり、1号小竪穴との重複関係を考えると後の混入である可能性がある。第8図2は、条線が施される土器片で焼成は良好、茶褐色を呈し、胎土に長石・雲母・石英粒を含む。外面は斜め方向に原体で調整を施した後、縦方向の条線を加え、内面は横方向のケズリの後ナデを施す。3は外面に炭化物が付着する。胎土に石英粒を含み焼成は良



土層注記

1　暗茶褐色土　粘性・しまりあり、ローム粒多く含む不均質土層
2　暗茶褐色土　粘性・しまりあり、ローム粒含む、1より暗
3　暗茶褐色土　2に似るが2よりやや明
4　暗茶褐色土　粘性・しまりあり、ローム粒やや多く含む
5　暗茶褐色土　2よりやや暗
6　暗茶褐色土　5より暗
7　暗茶褐色土　5より暗、6より明
8　暗黄褐色土　ローム土多く含む
9　暗茶褐色土　ローム粒・ブロック含む
10　ローム層

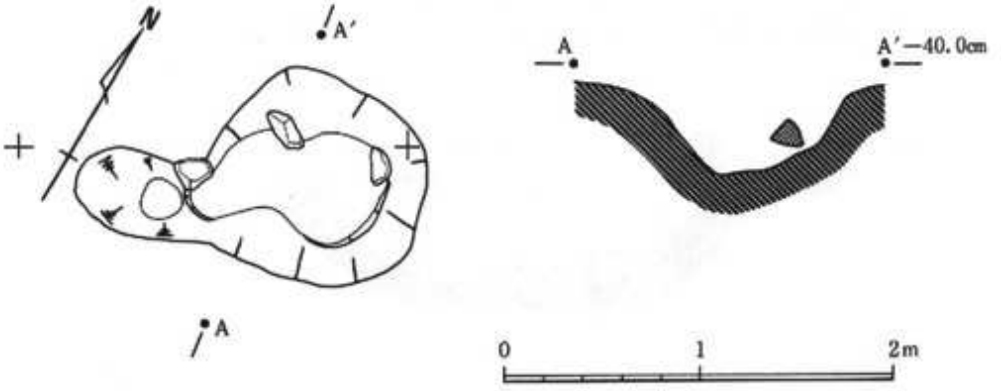
第6図　1・2号小竪穴平面図・エレベーション図・土層堆積図（S＝1/40）

好、外面に斜め方向の細密条痕が施される。内面はヨコ方向のミガキである。5は微隆帯の上に押圧を施し、その後茎状の工具で条痕を施す。胎土に石英粒を多く含み、色調は淡褐色を呈する。6は、底面の礫の下から検出されており、遺構の所属時期を考える参考となろう。細かい石英粒等を多く含み、焼成はやや甘い。色調は外面が灰褐色、内面が茶褐色を呈する。棒状工具で浅い条痕を施す。7・8は無文の土器片である。7は胎土に砂粒・石英粒をやや多く含み、外面暗灰褐色、内面淡茶褐色を呈する。内外面共にナデの後、外面はタテ、内面はヨコ方向のミガキが加えられるが、あまり密ではない。

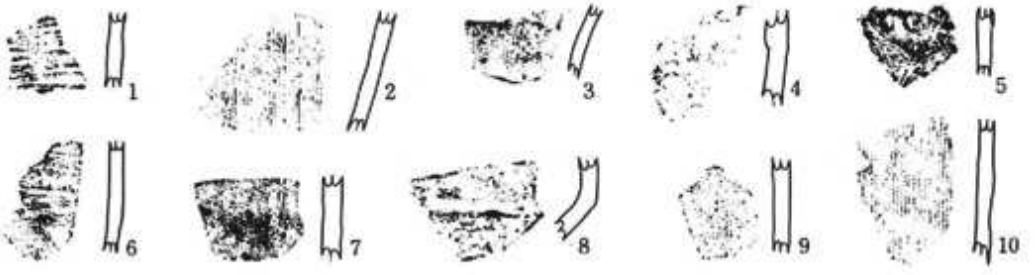
3号小竪穴（第7・8図）

3Eグリッドの耕作土を掘り下げたところ、グリッド南側のローム層上面において落ち込みが確認されたため、拡張・掘り下げを行った。覆土は茶褐色で礫を含む。平面形は、やや不整な楕円形である。西側に突出した部分があるが、撹乱であると思われる。

出土遺物は縄文前期土器・細密条痕を施す土器（第8図9・10）・土師器片などが検出されているがいずれも小片・細片である。



第7図　3号小竪穴平面図・エレベーション図（S=1/40）



1……1号小竪穴・2～8……2号小竪穴・9・10……3号小竪穴　0　5　10cm

第8図　1～3号小竪穴出土土器（S=1/3）

検出された遺構のうち、1号および3号小竪穴については、性格・所属時代が不明であり、特に1号小竪穴については前述のような覆土の状況から桑株の痕跡である可能性も否定できない。2号小竪穴については、遺構壁面から底部にかけて礫が検出されていること、楕円形に近い平面プランを有することなどから、墓壙であると考えられる。所属時期は、遺構底面から検出された土器片などを参考にすると、縄文時代晩期から弥生時代中期、あるいはそれ以降に属するものであると思われる。

2．その他の出土遺物（第9・10図・第1表）

前述したもののほかに各グリッドから土器片・石器類等が検出されている。

土器は小片・細片ばかりであり、器形全体をうかがえるものはない。

1・2は調査区東側約60mの地点で表面採集されたもので、縄文時代前期の土器片である。1は胎土に石英粒等を含み、外面に格子目状の沈線を茎状工具で加えている。2は、縄文を施した後竹管で区画を行い、区画外の縄文を擦り消しているようである。

3～8は縄文時代中期初頭の土器片であろう。3・4は結節縄文が施されている底部の破片であり、胎土に石英粒を多く含むほか雲母片を含む。4は底部が張り出す深鉢であろうが、3の器形ははっきりしない。5・6は竹管文が施される。7・8は縄文を施した後沈線文を加える。沈線の縁に刺突が施される。7は口辺部の破片であり、肥大した口唇部にも縄文が施されている。

9は中期中葉の土器片である。

10～39は縄文時代晩期末葉から弥生時代中期前半の土器片である。10～13は、細密条痕が施される土器片であり、10は淡茶褐色を呈し、タテ方向に細密条痕を加えた後1条ヨコ方向に加えている。11はヨコ方向（？）、12・13はナナメ方向の細密条痕が加えられる。12は暗褐色を呈し、石英粒・雲母片を含む。内面はヨコミガキが加えられている。13は石英粒等を含み、内面に炭化物が付着する。外面は明茶褐色を呈するが、所々表面が剝落している。内面はナデの後、やや粗いミガキが加えられる。14は粗い条痕が加えられている。やや淡い褐色を呈し、胎土に多くの石英粒と小量の雲母細片を含む。内面はナデである。15・16は同一個体で外面は黒褐色、内面は明茶褐色を呈する。細い半截竹管状または茎状の工具でヨコ方向の条痕を加え、内面はケズリ＋ナデである。17・18は無文の土器片で淡茶褐色を呈し、内・外面とも丁寧なミガキが加えられている。19はやや淡い茶褐色を呈し、胎土に砂粒等をやや多く含み粗な感じがするが、焼成はやや甘い。半截竹管様または2本1組の細めの棒状工具による条痕を有する。20は薄手で焼きの良い土器片で灰茶褐色を呈し、内面はナデ、外面は棒状工具で荒い条痕（条線）を施す。あるいは縄文前期に属するものかも知れない。22の内面は、半截竹管様工具の工具等による調整痕・ミガキを残す。23～31は棒状工具等による密な条痕が施される。多くが淡茶褐色～淡灰褐色であるが、23・27は暗褐色～黒褐色を呈する。また、内面の調整はほとんどがナデのようだが30はヨコ方向の

ミガキが加えられる。26・28は胎土に5・6mm大の石英粒・砂粒を含む。条痕の原体等は細片が多いため判別が困難であるが、30・31などは、2本または3本1組の棒状工具様のものを用いているらしい。32は壺の破片と思われるが、ヨコ方向と波状の条痕が施されている。内面はナデで、胎土に石英粒・細砂粒・茶色粒子を含み、焼成良好で淡茶褐色を呈する。33は壺の口辺部で、胎土に砂粒及び石英粒を多量に含むが焼成は大変良好である。内面にはヨコ方向のケズリがそのまま残るが、胎土に砂粒を多く含んでいるためにかなり荒い感じになっている。外面は、棒状工具によるヨコ～ゆるい右下がりナナメ方向の条痕を施した後、口縁下に1条の粘土紐隆帯を張り付けその下端をなぞる。隆帯上にはヘラ状工具による深い圧痕が加えられ、色調は赤茶褐色を呈する。34～39は、綾杉状の条痕（沈線文）が施された土器片である。34～36は甕の破片であろう。35の外面には炭化物の付着が認められる。

なお今回の調査では、検出された概期の土器片中口辺部の破片は、図示したもののほかに細片が1点検出されたのみである。

40・41は弥生時代中期後半の土器片であろう。40は沈線文、41は綾杉状の櫛描文が施されている。

42～45は弥生時代後期の土器片である。いずれも甕の破片であると思われ、口縁部から肩部にかけて横位の櫛描波状文が施されている。42・43は別個体であるが、いずれも肩部以下は、櫛描文の上からタテ方向のミガキが加えられている。

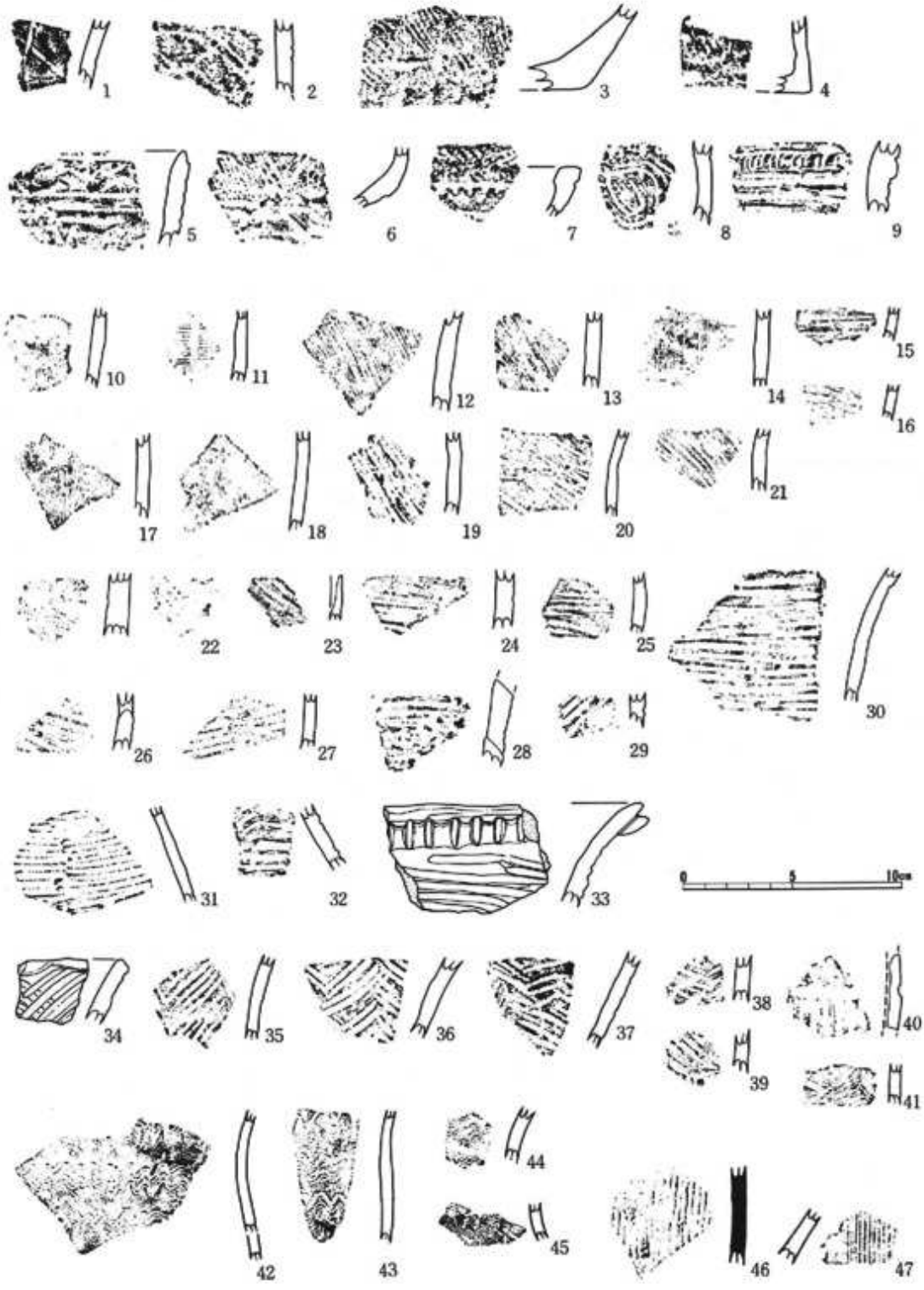
土師器は、破片が70点近く検出されているが、いずれも細片であるため、図示できなかった。しかし、これらのうち約3分の1は内黒の坏の破片である。

46は須恵器片、47は鉄釉が施されたスリバチの破片である。

これらのほかに、管状の土錘（第10図7）が1点、検出されている。

	縄文前期	縄文中期	縄文晩期末～弥生中期前半				無文	弥生中期後半	弥生後期	土師器	須恵器	灰釉陶器	陶器・磁器	時代不明土器片	ob剥片	ob剥片(2次調整)	その他の石器 土製品等
			細密条痕	擦痕状	条痕	羽状沈条線痕											
1号小竪穴				1	3												
2号小竪穴		1	1	1	3		3			3					1		
3号小竪穴	1		2							3							
遺構外		9	5	2	23	6	20	2	7	51	2	1	3	7	12	5	ob石鏃1 ob石錐1 打斧(片)1 ch剥片1 他剥片4 土錘1
3区東側表採	5						3			11					2		ch石匕1
合計	6	10	8	4	29	6	26	2	7	68	2	1	3	7	15	5	

第1表　出土遺物一覧表（ob…黒曜石　ch…チャート）



第 9 図　遺構外出土土器（S＝1/3）

今回の調査で検出された土器片類のうち最もめだったのは縄文時代晩期末葉から弥生時代中期前半のものであるが、その他の時期のものはどちらかというと流れ込み的な様相を示していた。しかし縄文土器片・石匙などが表面採集された、本区の東側の地点などについては今後も注意する必要があろう。

石器はすべて遺構外の出土で、このうち石匙（3）は本区東側地点の表面採集品である。主な石器6点を第10図に示した。

1は黒耀石製の石鏃である。先端部をわずかに欠損するが、現在長2.0cm、幅2.1cm、厚さ0.4cmを計る。ほぼ片面加工の石鏃で、腹面には未加工の平坦な第一次剥離面を残している。この面は素材となった剥片の主要剥離面である。もう一方の背面は、両側辺部を中心に入念な二次加工が施されている。

2は黒耀石製の、二次加工ある剥片である。全体的な形状から、石錐の未成品である可能性が高い。長さ4.5cm、幅2.9cm、厚さ1.4cmを計る。自然面を打面側に残す分厚い剥片を素材とする。二次加工は片側辺の両面に集中し、細かい連続的な剥離が認められる。尖端部に相当する付近にもわずかに加工が施されているが、つまみ部に相当する部分には未加工である。

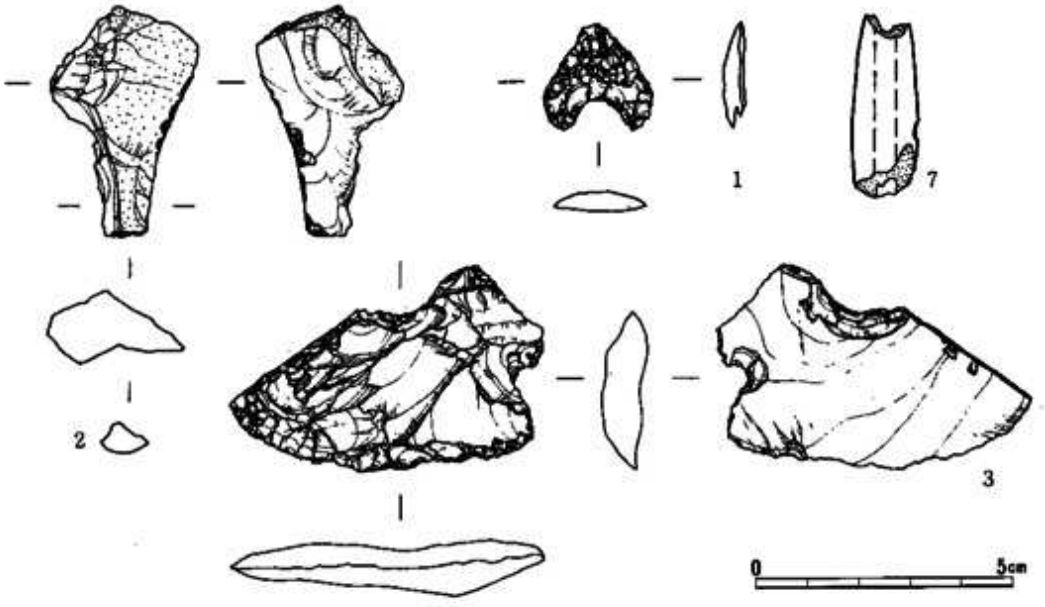
3は青灰色チャート製の石匙である。完成品で、長軸6.1cm、短軸4.0cm、厚さ1.0cmを計る。横長の剥片を素材とし、図のつまみ上端部と身部左辺の二か所を折り取って形状を整えた上で、二次加工を施している。腹面はつまみ刻入部以外には調整剥離がなく、素材剥片の主要剥離面を広く残している。背面側の加工は全面に及び、特に刃部の連続的剥離が最も顕著である。また、折り取って成型した側辺部にも、折り面を打面とする連続的な二次加工が認められる。

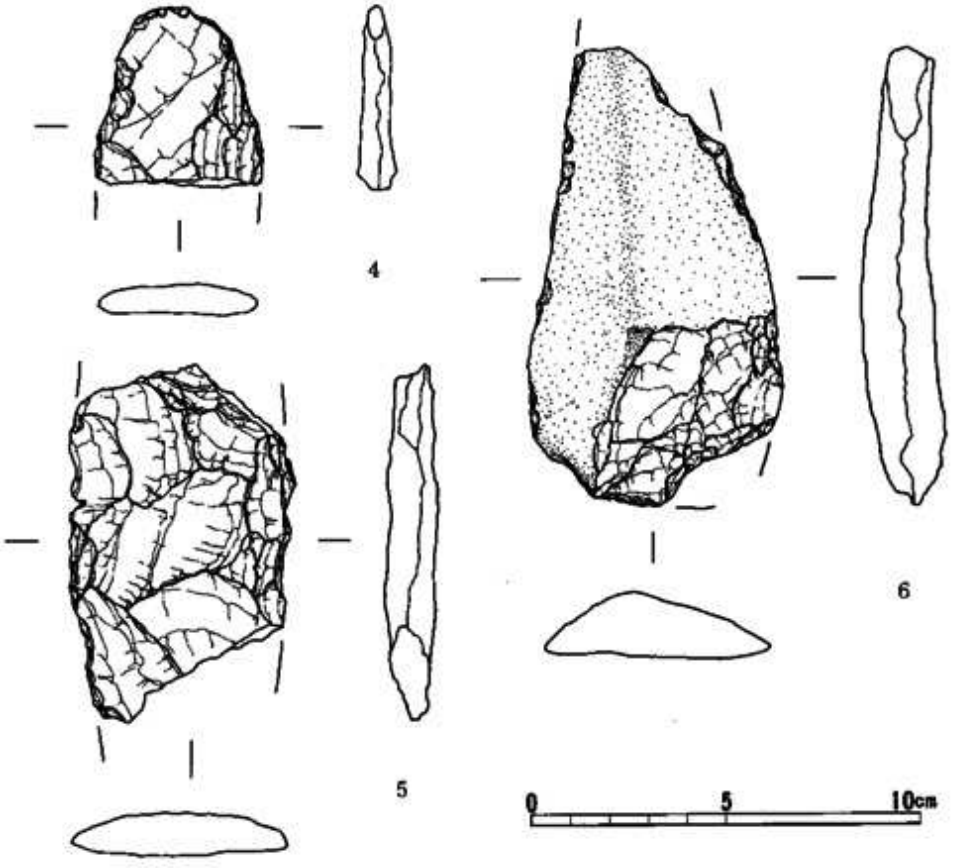
4～6は、打製石斧の破片および未成品である。

4は砂岩製の打製石斧の基部破片で、現在長4.6cm、幅4.3cm、厚さ1.0cmを計る。背面に両側辺側からの調整剥離が施され、かなり薄く仕上げられている。

5は黒色片岩製の打製石斧の胴部破片である。基部および刃部側を欠損し、さらに胴部も縦方向に剥落しているため、腹面には平坦な破損面が認められる。現在長9.2cm、幅5.8cm、厚さ1.2cmを計る。残存部には全面にわたって二次加工が施されている。また、縁辺部には連続的な小調整剥離が認められる。

6は緑色片岩製の石器で、打製石斧の未成品と考えられる。基部・刃部ともに欠損しており、十分な調整剥離が施される前に石器製作作業が中断されている。片面に大きく自然面を残す扁平な剥片を素材としている。縁辺部には小剥離による調整、刃部片側に連続的調整剥離が認められる。





第10図　遺構外出土石器・土製品（1～3・7…S＝2/3、4～6…S＝1/2）

V　調査のまとめ

有賀の現集落は有賀峠直下の扇状地の東南に集中している。扇央部を流れる中沢川の東南で、その扇状地北側は住宅は少ない。扇状地北側一帯は、千鹿頭社遺跡と十二ノ后遺跡で、原始・古代集落址が埋没している。

扇状地東南には女帝垣外・中道・清水遺跡があり、現在の住宅と重なっていて、これ等遺跡の性格は十分把握できない。しかしこの範囲内には、小丸山古墳・久保塚（廊下久保）古墳・清水古墳の築造があり、古墳を築造した有力族長とその背後集団が存在したのは確実である。また、古社として諏訪明神に関係する千鹿頭社伝説。有賀の七ミシャグジ伝説。有賀峠の七石伝説・峠の積石塚・峠神奉祭の石製模造品の出土。女帝垣外と女帝塚伝説など、古代伝承の多い地区で、古代からの繁栄をうかがわせ、現集落と重複しているものとみられる。

今回調査の行われた清水遺跡は有賀の東南端に位置し、３区はもっとも端にあり、此処は小丸山古墳の北下で、清水古墳に隣接している。古墳時代の集落は古墳から離れているから、この時代としては本位置周辺は墓域と認識されていたかも知れない。遺跡分布調査の際も本遺跡と南方の大安寺遺跡との間は、遺物の分布は少なかった。

今回調査による出土土器から観察すると、縄文晩期から弥生時代の土器片が多い。諏訪地方の縄文晩期の様相は十分に判っていない。新しい稲作り文化の時代の到来する時期で、稲作文化期前夜の様相を、有賀峠と前面の沖積地をひかえた清水遺跡は含んでいるものである。今後とも周辺の調査に期待するものである。

主要参考文献

日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会　1975　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　諏訪市その３』

日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会　1976　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　諏訪市その４』

日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会　1982　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　茅野市その５』

百瀬長秀　1986　「浮線文系土器の変遷と分布」『歴史手帖』　14－２　名著出版

日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・㈶長野県埋蔵文化財センター　1987　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書　１』

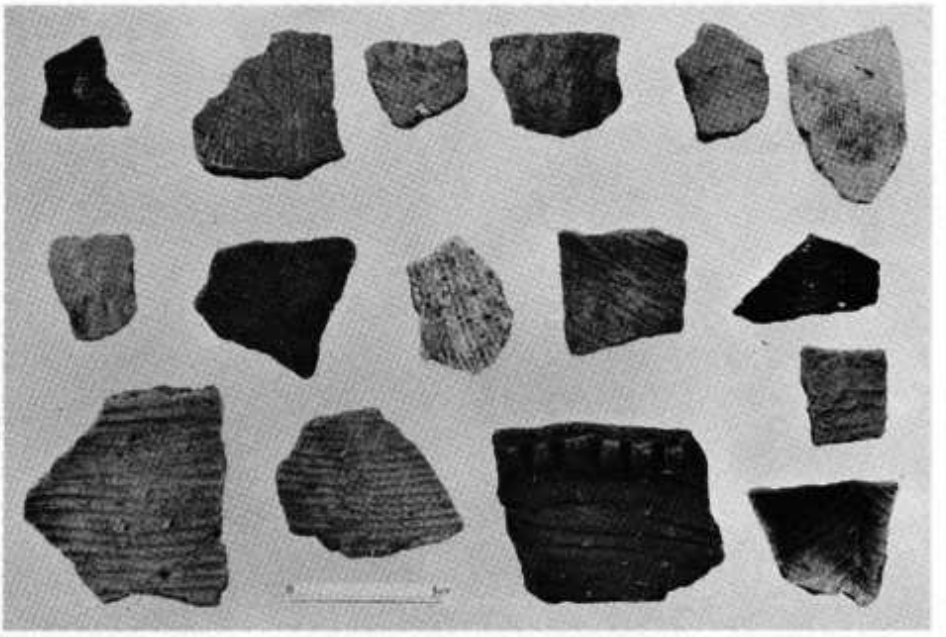
長野県松本地方事務所・松本市教育委員会　1987　『松本市赤木山遺跡群Ⅱ』

長野県史刊行会　1988　『長野県史』考古資料編全一巻（四）遺構・遺物

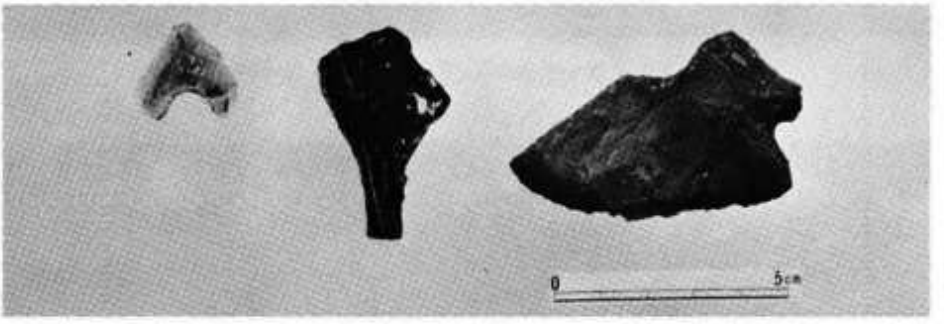
写真図版

1．1・2号小竪穴（右・1号小竪穴、左・2号小竪穴）

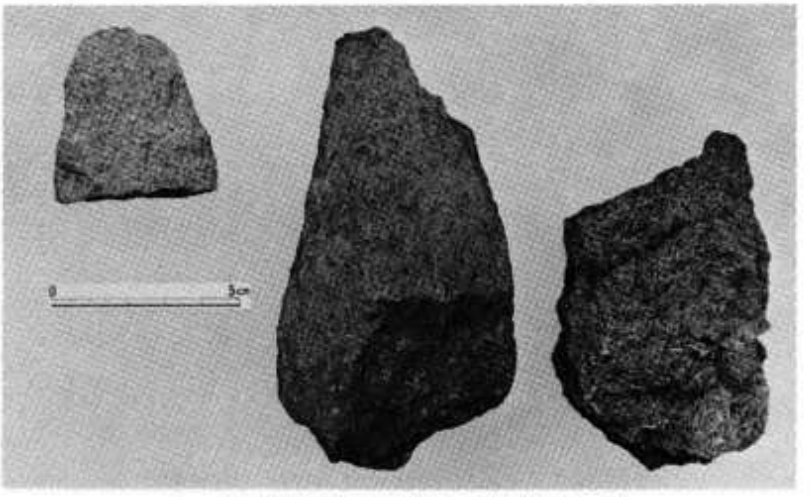
2．作業風景



3．清水遺跡出土土器　（上段左より第８図１・２・５・７・９・10、中段第９図10・12・19・20・27・32、下段第９図30・31・33・36）



4．清水遺跡出土石器（左より第10図１・２・３）



5．清水遺跡出土石器（左より第10図４・６・５）

清　水　I

ー長野県諏訪市清水遺跡第3次発掘調査報告書ー

1990年3月30日

編集　諏訪市高島1-22-30
発行　諏訪市教育委員会

印刷　㈱マルジョー上田印刷